

芥川龍之介

羅



生

門

羅
生
門

或日の暮方の事である。一人の下人げにんが、羅生門らしようもんの下で雨あまやみを待っていた。

広い門の下には、この男の外まがに誰もいない。唯ただ、所々丹塗にぬりの剥はげた、大きな円柱まるばしらに、蟋蟀きりぎりすが一匹とまっっている。羅生門らしようもんが、朱雀大路すざくおおじにある以上は、この男の外まがにも、雨やみをする市女笠いちめがさや揉烏帽子もみえぼしが、もう二三人はありそうなるものである。それが、この男の外まがには誰もいない。

何故なぜかと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風つじかぜ

とか火事とか飢饉ききんとか云う災がつづいて起った。そこで洛中らくちゆうのさびれ方は一通りでない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路みちばたにつみ重ねて、薪たきぎの料しろに売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸こりが棲すむ。盗人ぬすびとが棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を

悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまったのである。

その代り又鴉からすが何処どこからか、たくさん集つて来た。

昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて高い鴟尾しびのまわりを啼なきながら、飛びまわっている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論もちろん、門の上にある死人の肉を、啄ついばみに来るのである。——尤もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。唯、所々、崩れくずかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上には、

鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に洗いざらした紺あおの襖あおの尻しりを据すえて、右の頬ほおに出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺ながめていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は、雨がやんでも格別どうしようとう当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可べき筈はずである。ところがその主人からは、四五日前に暇ひまを出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいゐしていた。今この下人が、永年、使われていた主

人から、暇を出されたのも、この衰微の小さな余波に外ならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からずこの平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申まをの刻下こくさりからふり出した雨は、未いまだに上あがるけしきがない。そこで、下人は、何を措おいても差当さしあたり明日あすの暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから

朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていた。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇ゆうやみは次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜ななめにつき出した葺いらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいる違いとまはない。選んでいれば、築土ついでの下か、道ばたの土の上で、飢死うえじにをするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何

度も同じ道を低徊ていかいした揚句に、やっところこの局所へ逢着ほうちやくした。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為に、当然、その後のちに来る可ききた「盗人ぬすびとになるより外に仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くさめをして、それから、大儀たいぎそうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮な

く、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行つてしまった。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹の汗衫かざみに重ねた、紺あおの襖あおの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽さいわいにねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸さいわい門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖ひじりづか柄たの太刀ちが鞘走さやばしらないように気をつけ

ながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺うかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚ひげの中に、赤く膿うみを持った面皰にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くくっていた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を

其処そこ此処ここと動かこかしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々すみずみに蜘蛛くもの巣をかけた天井裏に、ゆれながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這はうようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしなから、頸くびを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、楼の内には、噂うわさに聞いた通り、幾つかの死骸しがい

が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、嘗^{かつて}、生きていた人間だと云う事実さえ疑われる程、土を捏^こねて造った人形のように、口を開^あいたり手を延ばしたりしてごろごろ床^{ゆか}の上にくろがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら

ら、永久に唾おしの如く黙もくっていた。

下人は、それらの死骸しかいの腐爛ふらんした臭気おしみに思わず、鼻おを掩おった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻おを掩お事を忘れていた。或る強い感情が、殆ほとんど悉ことごとくこの男の嗅覚きゆうかくを奪うばってしまったからである。

下人の眼は、その時、はじめ、その死骸しかいの中に蹲うずくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいろの着物を着た、背の低い、瘦やせた、白髪頭しらがの、猿さるのような老婆らふである。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きぎれを持って、その死骸しかいの一つの顔を覗のぞきこむように眺ながめていた。髪の毛の長い所を

見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って下人の心か

らは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧^{むしろ}、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片さぎなれのように、勢よく燃え上り出していたの

である。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従つて、合理的には、それを善悪の何れいずに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許す可べからざる悪であつた。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。そうして聖ひじりづか柄の太刀たちに手をかけ

ながら、おおまた大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは、云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるでいしゆみ弩にでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、あわ慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、ののしこう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく暫、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじ

めから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ねじ倒した。丁度、鶏の脚のよう
な、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払
って、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれど
も、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩
で息を切りながら、眼を、眼球めだまが眶まぶたの外へ出そうにな
る程、見開いて、唾しゅうねのように執拗しゅうねく黙っている。これを
見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、

自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうして、この意識は、今まではげしく燃えていた憎悪の心を何時の間にか冷さましてしまった。後に残ったのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔やわらげてこう云った。

「己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。唯、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それを己に話しさえすれ

ばいいのだ」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、にくしよくちよう肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺しわで、殆、鼻と一つになつた唇くちびるを、何か物でも噛かんでいように動かした。細い喉のどで、尖とがつた喉のどぼとけ 仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼なくような声あえが、喘あえぎ喘あえぎ、下人の耳へ伝わつて来た。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな、鬢かざらにし
 ようと思つたのじゃ」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そう
 して失望すると同時に、又前の憎悪が、冷ひややかな侮蔑ぶべつと一
 しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色けしきが、
 先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸
 の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓ひきのつぶやく
 ような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。
 「成程な、死人しびとの髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い
 事かも知れぬ。じゃが、ここにゐる死人どもは、皆、そ
 の位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わ
 しが今、髪を抜いた女などはな、蛇へびを四寸しすんばかりずつ切

って干したのを、干魚ほしうおだと云うて、太刀帯たてわきの陣へ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかって死ななんだら、今でも売りに往いんでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料さいりょうに買かっていたそうなの。わしは、この女のした事が悪いとは思おもうていぬ。せねば、餓死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今又、わしのしていた事も悪い事とは思おもうわぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの。じやて、その仕方がない事を、よく知しっていたこの女は、大方わしのする

事も大目に見てくれるであろ」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面炮を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さつき、門の下でこの男に欠けていた勇氣である。そうして、又さつき、この門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする

勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、殆、考える事さえ出来ない程、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか」

老婆の話が完ると、下人は嘲あざけるような声で念を押しした。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皷えりがみから離して、老婆の襟上えりがみをつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己ひきが引剥はぎをしようと思おもいな。己ひきもそうし

なければ、餓死をする体からだなのだ」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒けたおした。梯子の口までは、僅わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色ひわだいろの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで這って

行った。そうして、そこから、短い白髪しらがを倒さかさまにして、
門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々こくとうとうたる夜がある
ばかりである。

下人の行方ゆくえは、誰も知らない。

日本文学電子図書館

羅生門・鼻

著者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社
昭和43年7月20日発行

日本文学電子図書館